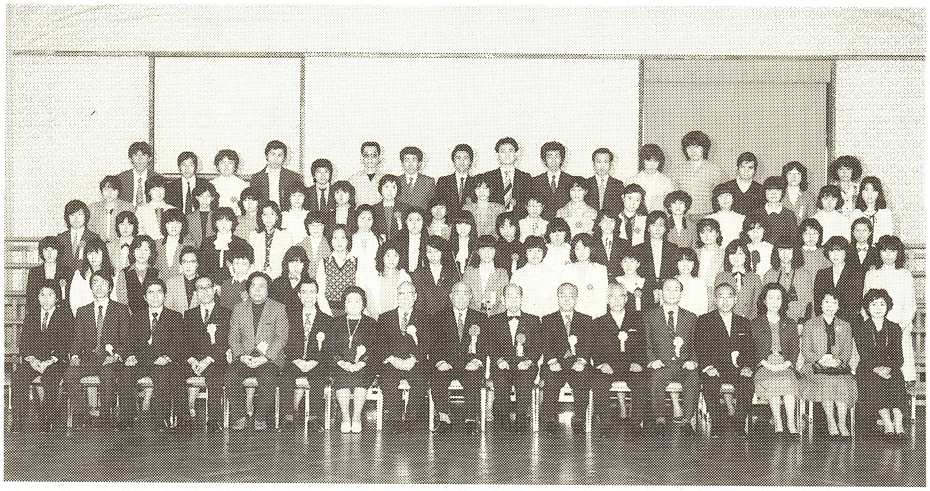
いたのでした。優勝旗は私が渡すのが本当かもしれないのですが、もし私の父が健在であったら父から渡してもらうのです。しかし父はいないものですから、代わって叔父さんから渡していただくようにしたのでした。叔父さんは二十四歳で郷里長崎県島原の村長をされた人でした。開会の辞はなかなか上手にあいさつされ、毎年この大会を非常に楽しみにしておられたのでした。

叔父さんはよそから相撲の招待券をもらっておられたのですが、相撲のあるときはいつも私を連れて行かれたのでした。また伊藤　彰さんが上京されるといつもごいっしょしていたのでした。ある時伊藤　彰さんといっしょにおじゃましているときでした。叔父さんが「平平平平」と書かれて、これは何と読むかといわれたので、私が「ヒラダイラ　ヘイベイ」と読んだら非常に感心しておられたことも思い出せるのです。惜しいかな、八十歳で亡くなられたのは誠に残念でならない



申根速記学校56年度入学式　　S56.4.14　於 九段会館